

森の木魂（こだま）

2024年07月24日発行 第13号

目次

・第5回総会代表挨拶……………	1	・天国の妻に足尾の森を報告したい……………	10
・第5回総会報告……………	2	・足尾の森の整備に参加して……………	11
・「意見交換会」報告……………	4	・10年目を迎えた応援隊……………	12
・みちくさでつながりたい……………	6	・里親から託された苗木にいのちを吹き込む……………	13
・森づくり20年から、いのちを守る森づくりへ……………	7	・石川県能登半島地震被災地視察/工口散歩……………	14
・「孤高のブナ」と「希望のブナ」との対面……………	8	・ミノムシ・編集後記……………	16



第5回総会代表挨拶



目黒会場にて挨拶をする桜井代表

皆さん、こんにちは。運営委員会を代表致しまして、ご挨拶申し上げます。第5回総会に出席いただきました皆さんに改めてお礼を申し上げます。

2023年につきましては、皆さんのご協力で様々な活動を行うことができました。十分な成果があったかどうかは、運営委員会としても総括しなければならない部分があると思います。今までの活動を振り返りながら、さらに総会を通じて新たな歩を進めてまいります。私が20年を迎える森びとプロジェクトの活動に賛同したのは、当時NPO法人森びとプロジェクト委員会の代表であった岸井成格さんに森の重要性と大地に木を植えることの大切さを教えられたことが理由の一つにあります。そして、東日本大震災で多大な犠牲者を出し、東京電力福島第一

原子力発電所事故によっておよそ8割以上の住民が南相馬市を避難させなければならないような状況に追い込まれた時に、南相馬市の市長として指揮をとる中で、南相馬市で失われた命をどうやって後輩たちに伝えていくのかを考え、森びとプロジェクトの皆さんにご協力いただき、防潮堤に木を植える鎮魂復興市民植樹祭を開催いたしました。こちらは、今も協力いただいていることを改めてお礼を申し上げます。

今年1月1日に発生した能登半島地震。大変な犠牲を強いられた能登半島の住民の皆さんに、改めてお悔みとお見舞いを申し上げますと思います。私も過日能登半島の視察をしてまいりました。視察を案内していただいたのは珠洲原発を作らせない運動を長年にわたって支えてきた元県議の北野進さんでした。彼は「志賀原発を廃炉に！訴訟原告団」の団長でもあります。この命を守ることの大切さと原発とは共存できないということが、能登半島地震において改めて認識させられたと思います。原発が仮に珠洲市にできていたとすれば、大変な犠牲を出したであろうし、その先見性と愛郷心に基づいて原発を作らせない運動を支えてきた皆さんに改めて敬意を表します。

森びとプロジェクトを支える皆さんも、このような「命を大切にする」という原点から出発してきた運動だと思います。今総会を通じて改めて皆様方と心をつなげながら、さらに歩を進めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

代表 桜井勝延

事業報告 第5回総会報告



6月22日(土)、東京都品川区の目黒さつきビル会議室において第5回総会を開催し、目黒さつきビル会議室とZoomによるオンラインで行いました。

13時、小黒運営委員の司会で総会が開会され、総会には正会員372名中委任状を含む258名の参加があり、規約に基づき会員の3分の1以上の出席を確認し、総会の成立が宣言されました。議長には神奈川県ファンクラブの木之下貴弘さんを選出し、議事が進められました。

主催者あいさつ以降、議事次第に基づき第1号議案：2023年度活動経過報告、第2号議案：2023年度収支決算報告、会計監査報告を行い、第3号議案：2024年度活動方針案、第4号議案：2023年度剰余金の処理、第5号議案：2024年度予算案を提案しました。

その後、質疑応答が行われ、会場とオンライン参加者の13名から各地での活動が報告されました。

今総会では、大山博延運営委員と高橋よし子会計監査が退任され、新たに運営委員に田城郁さん、広報アドバイザーに大山寛恭さん、会計監査に梁島幹雅さんが選出されました。総会をつくり出していた会員の方々の皆さま、活動を支えて下さったすべての皆さまに感謝申し上げます。

森びとプロジェクトの活動はNPO結成から20年目を迎えます。会員の皆さまをはじめ、地域や様々な方々とのつながりをより大切にし、「育樹活動」と「啓発活動」の両輪で、今後も歩を進めてまいります。

■ 第5回総会の発言要旨

総会では13名の会員より発言をいただきました。



2013年に仙台市荒浜で、2017年には名取市閑上で東日本大震災の被災した海岸線に海岸防災林を再生し、津波被害の軽減と次世代に生態系豊かな森を引き継いでいくことを目標に育樹作業を進めてきました。先月、名取のいのちの森に行くと、毛虫が大量発生していました。これは毛虫を食べる鳥やハチなどの天敵が少なく、毛虫が大量にふ化していることや周囲は松だけの植林であり、いのちの森だけが広葉樹林となっているためではないかと思います。森の中で僅かな変化や事情から自然環境と人間のつながりや危機意識を持つことなど、多くのことを学ぶことができます。人間活動によって引き起こされる地球温暖化に少しでもブレーキをかけるため、森づくりを通じて今できることを仲間たちと共有し、実践していきます。(宮城県・林さん)



昨年4月に行われた孤高のブナの保護活動を新聞で見ると、森びとのボランティア活動に応募しました。私の提案は通信制もしくは通信制サポート校の高校生に体験活動の場としての利用についてです。足尾の森を子どもたちに活かすには、その場でじっくりと朝から晩まで自然を見たり、森の様子を見たり、またはボランティアの方と一緒に草を刈ったり、木を植えることを一緒にやって、その中で自然や環境に関心を持ち、そして疑問を持って、そのボランテ



ィアをやっている人たちと話をしながら繋がりを深めるということを足尾で出来るのではないかと考えました。小中学生は授業に取り入れられています。時間的な制約があります。一方、サポート校は時間に余裕があり授業日数に縛られず、比較的少ない人数で実施できます。また、移動手段のバスなどを自前で持っているところもあり、レンタルができます。それから体験活動というのがサポート校の目的とマッチしています。高校生でもうすぐ社会に巣立つ年齢なので、この足尾の森での経験は自分の進路を決めたり、自分の職業を決めたりするのに大きな役割を果たすのではないのでしょうか。(栃木県・田村さん)



私たちが活動してきた足尾の森をどのように活かすのか。栃木県のサポーター、ないしは若い人に引き継ぐシニア世代の問題だと思っています。足尾の作ってきた森をいわゆるショーウインドのように、森を整備していったらどうかと思います。都会の人たちはほとんど人工物で育っております。足尾に入ると自然物があります。人工物の世界と自然物で囲まれた世界がどのように違うのか？小学生の人たちに感じてもらいたいと思っています。五感で、自分たちの日頃暮らしている世界とどう違うのか体感してもらうことが足尾の森を整備していく目的になるのではないかと思います。自然物で構成されている世界は、どんなに心地よいかっていうことを小さい時に感じていけば、森に戻ってきます。(栃木県・山本さん)



■運営委員会からのまとめ（清水）

「この20年間で足尾では（株）古河機械金属様にお借りしている面積が55,611㎡、植樹本数は79,370本、補植を含めると約8万本植えてきました。1人の酸素を供給するには20本の木が必要ですので、少ないかもしれませんが約4,000人分の酸素を供給する森に生長しました。6月7～8日に中村アドバイザー、井上運営委員と森の調査に入りました。中村アドバイザーからは宮脇方式で森をつくり、現在高木層と亜高木層と階層ができています。次の課題は低木層と草本層が作られれば、本物の森になるということでした。皆さんと20年間森づくりをしてきて、一つ森の成長点に達しました。今後どのように育樹活動をしていくのかを見ることができました」などとまとめを致しました。

運営委員 小林敬

【運営委員会】（順不同）

新たな運営委員会のメンバーです。
皆さんどうぞよろしくお願いいたします！

●アドバイザー

森づくり：高橋佳夫
政治：山崎 誠（衆議院議員）
科学：倉澤治雄（科学ジャーナリスト）
植生：中村幸人（東京農業大学名誉教授）
森林：川端省三（法人職員）
広報：大山寛恭（会社員）＜新任＞

●運営委員

代表：桜井勝延（南相馬市議会議員）
副代表：清水 卓（法人職員）
運営委員：井上 康（法人職員）
運営委員：大野昭彦
運営委員：小黒伸也（会社員）
運営委員：小林 敬（会社員）
運営委員：田城 郁（法人職員）＜新任＞

●会計監査員

監査員：笹沼信男（会社員）
監査員：梁島幹雅 ＜新任＞

事業報告

「原発回帰と気候危機に向き合う生活を考える意見交換会」報告

4月6日（土）、「原発回帰と気候危機に向き合う生活を考える」意見交換会を開催しました。黙とう後、主催者あいさつに立った桜井勝延代表は「原発のない社会、そして気候危機に向き合う社会を考えていきたい。3・11東日本大震災、原発事故により南相馬市でも2,500人以上が避難を余儀なくされており過疎化が進んでいます。そして、子供を育てる環境への不安から、女性が戻って来ない現実もあります。能登半島地震で志賀原発が事故を起こしていたらどうなっていたか。珠洲市の人たちの珠洲原発計画反対の闘いが北陸の人たちを守ったのではないのでしょうか。子孫にツケを残さない暮らしをしなければなりません」と訴えました。

意見交換会には、石川県珠洲原発建設計画に対して市民と共に反対の闘いを推し進めた珠洲市円龍寺住職・塚本真如さんよりビデオメッセージをいただきました。『今年1月1日に発生した能登半島地震の震源地近くの珠洲市では、1975年に原発建設計画が持ち上がり、住民の反対運動とそれを切り崩す電力会社側との闘争が、計画凍結までの闘争が28年続きました。計画が持ち上がった当初は原発に賛成でも反対でもありませんでした。原発とはどんなものか、発電所のある福井の方から話を聞き、本を読み、学ぶほどに安全は嘘で固められていると疑うようになりました。放射能と人間は共存できないと。電力会社による住民の懐柔が始まり賛成派、反対派と住民が分断されるようになりました。絶対に原発は良くないが、住民一人一人に生活があり、推



珠洲市円龍寺住職 塚本真如さん



科学ジャーナリスト 倉澤治雄さん

進派だから、反対派だからと個人攻撃、批判はしてはいけないと徹底しました。次世代を生きる皆さんへのメッセージでは『嫌なものは嫌だと堂々と言える社会を望みます。正直に言える、共有することの難しさを学んでほしい。「強い者の味方をするのは坊主じゃない」「迷ったら困難な方を選べ」という亡き父の教えが原発建設反対の闘いを貫いた私の信念です』と仰っていました。



続いて、科学ジャーナリスト 倉澤治雄さんより「日本の原発問題を皆さんと一緒に考えましょう」と問題提起を受けました。『今、日本全国の原発を歩いています。原発の他に大学の原子炉、東芝の原子炉、米軍横須賀基地の原子力船など、日本全国に配置され、核物質が行き来しています。プレートの狭間で地震の帯に連なる日本の自然環境の中で単に原発事故だけでなく、地震や津波、火山や台風など複合災害として発生します。能登半島地震では地面が4mも隆起し、家屋の倒壊、火災、道路の寸断などで、避難もできない状況です。志賀原発で起きたトラブルを見れば、珠洲原発を白紙撤回に持ち込んだ住民の闘いで命が救われました。住民の力で押し返すことが出来るのです。東電福島第一原発事故を振り返り、原発事故から逃げられない現実を受け止めなければなりません。日本の教訓として、災害は忘れなくてもやってくる。日本の国土は極めて脆弱。急速な高齢化が進行。原発事故は複合災害。この日本で原発を進めるべきかどうか、子供たちに何

を遺すのが私たちに問われていることです』と自分の問題として考えることを問いかけられました。

政府は「脱炭素化」実現に向けて、原発の次世代型への建替えや運転期間 60 年超への延長を打ち出し、柏崎刈羽原発や女川原発などの再稼働へと動き出しています。地震の帯に連なる日本列島。気候変動は単に原発事故だけでなく、自然災害を伴い複合災害として発生しています。各地で被災されている現実を直視しなければなりません。

「大量生産・大量消費・大量破棄」の生活スタイルの見直しと、自分が住む地域の避難先や道路状況、水道、電気などのインフラ整備や避難計画の確認、避難生活に必要な生活物資の確保など、命と健康と生活を守るための備えを考えなければなりません。命の基盤である森に寄り添って生きていくための“つながり”を広めていくために、生活を営む地域の皆さんと共通の認識をつくる話し合い「お茶会」を開き、原発に頼らないエネルギー政策や温暖化対策へ市民の声を反映させていきましょう。

副代表 清水卓

■参加者の感想

現在の福島第一原発はどうなっているのか、東京電力の HP 内の「廃炉プロジェクト」にバーチャルツアーがあり現在の内部等を見ました。原子力発電所は原子炉があるところだけが敷地だと思っていたので、こんなに広いことに驚きました。そして、バーチャルツアーを見ていくうちに廃炉プロジェクトは今後何十年もかかると思いました。除染廃棄物の最終的な処分やタンクにある処理水の放出もすべてが空になるまでやらなければなりません。処理水はおよそ、30 年かかるそうです。自分が生きている間にすべてが終わるとは到底思えません。また、今は昔に比べると電力への比重が大きくなっていると思います。IH のキッチンやオール電化、必要不可欠なスマートフォンの充電や Wi-Fi 等の電波にも関わってきます。大切な電気を確保するために発電所が動いているのは分かりますが、シンポジウムで聞いた通り日本は地盤が弱いし、プレートが動き地震は多いし、津波は来るし、上に立つ人の人としての危機管理の甘さにより、原発の継続はしない方が良くと思いました。ドイツのメルケル前首相が行なっ



司会 矢野雅之さん

た原発の停止は日本も見習うべきですし、山崎誠衆議院議員が衆議院経済産業委員会に訴えた太陽光だけでなく、風力・水力・蓄電池など多くの発電できる機能を造っていくべきだと感じました。防衛費などに予算を回さず、再生可能エネルギーを製作するコストに使用すべきです。私たちにできることを搜していかなければなりません、政府にもっと地球規模で考えて政策等を行ってほしいと思いました。原発がどうなっていくのか今後も注視していきます。

賛助会員 中島祐美子



今回のシンポジウムに参加する前に、昨年 11 月に、『シェーナウの想い』という自然エネルギーに関するドキュメンタリーを観ました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原発事故を受け、ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州レラッハ郡にあるシェーナウという町は、節電キャンペーンから始まり、その後自然エネルギー中心の電力会社を設立しました。倉澤さんが指摘したように、原発事故の防災避難計画は地域のすべての人々（および生物たち）を十分に考慮していません。過去の原発開発・利用の歴史から、社会的な制御が不十分で多くの被害が生じてきました。これらの被害は格差や不平等を深め、またはその格差や不平等をさらに深刻にしました。このような状況を踏まえて、地域に根ざしたアプローチで、地域の産業構造・地方財政の問題を兼ねて、原発のソフトランディングおよびエネルギーのあり方を再検討し、集団的な行動をとる必要があると考えています。

賛助会員 フン・ワン・イン・キンバリー

足尾発！

みちくさでつながりたい

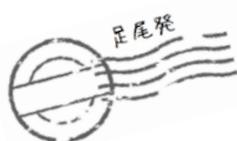


私はこの4月から「遊働楽舎」“みちくさ”舎人（しゃじん）の責任者として、歩み始めました。足尾に転居して5年、今ではすっかり地域に馴染み、友人や知人を沢山作ることが出来ました。その中で教訓は、①声をかけてみる②相手の話をよく聞く③時々連絡を取り合うというシンプルなものでした。関係が出来る、その人を通じて新たな人に出会える事が沢山ありました。“みちくさ”での出会いを大切に、新人の山田舎人と共に頑張ります。

このような関わりの中で、楽しい出会いがありました。野菜作りをしようと思い、畑を借りに持ち主にお会いしました。以前から目を付けていた完璧な獣害避けネット付きの畑です。それをお借りすることが出来ました。その持ち主の娘さんが、町おこしの為に古民家を改装して一軒貸しの宿泊施設「和朗庵」を作ったオーナーでした。その話を高橋アドバイザーに伝えると、「皆で1回泊ってみよう！海外からの旅行者も来ているなら、松木の森や溪谷、中倉山等を案内し、世界に発信をしてもらおう！」と、これからの活動の広がりを展望した論議になりました。

森びとは、発足20周年を迎えます。今まで積み上げてきた大きな成果を、支えて頂いた全ての皆さんと分かち合い、新たな20年を展望して頑張っていきたいと思います！

舎人 橋倉喜一



昨年の7月から、森びとプロジェクトのメンバーになり、足尾の森作業に携わる事となりました。全てが初めてとなる作業で、色々と覚える事が多々ありますし、今はとにかく身体を動かすことが一番と思っています。まだまだスタートしたばかりの森びとの活動の中で、今年の4月からは地元日光市在住ということもあり、“みちくさ”の舎人としての活動が始まりました。

できるだけ多くの回数を携わりたいと思っておりますが、仕事をしている中では月2回の舎人で経過している現状です。しかし、数少ない舎人としてのこれからは、“みちくさ”の周りの環境整備はもとより、松木沢溪谷の現状を自らが訪れることで知って学び、一番不慣れな点ではありますが、多くのハイカーや釣り人などここを通る人々への声掛けや、会話など積極的に行動することです。多くの人に立ち寄っていただき、どのような方々がこの足尾の地を訪れるのか、知り得た事を更に写真と活字を使ってHP等で情報発信することで、新たな人たちが今一度この足尾の地へ訪れたいという人たちが“また来たい”と思える一役を担えるよう、舎人として歩んでいきます。

舎人 山田浩

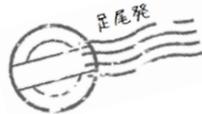


足尾発！

森づくり 20 年から、いのちを守る森づくりへ

私たちは来年で足尾の荒廃地に木を植えて 20 年を迎えます。その樹々の生長を観ると森に見えますが、全ての生きもののいのちを守る森に生長するには半世紀以上もかかると思います。来年以降の森の手入れする方法を他の森から学ぼうと、足尾町の久蔵川沿いの土砂流出防止・緑化で植林した林野庁の松林を調査しました。その後は、私たちのふるさとの木による宮脇方式の森を観察しました。（2024 年 6 月 7～8 日）

運営委員 大野昭彦



■ 1. 松を植えて 60 年、変化する森

久蔵川の道路沿いには、「間伐材利用推進モデル地区」と書かれた看板があり、この看板の北斜面にアカマツ林が広がっています。

林立するアカマツの幹回りは 87 cm、胸高直径 27 cm 程に生長していました。倒木や立ち枯れした松もあり、林縁には樹高 2m 程に生長したアセビが多く、風や動物散布と思われるカラマツ、ミズナラも生えていました。急斜面の林床にはリョウブが点々と生えていましたが、幹の先端が動物の食害と思われる跡がありました。観察の中では、リョウブの生長を促し、落葉広葉樹を増やせば有機物が溜まり土壌動物が土を作れるようになり、人間が手を入れれば遷移が加速するのではという声がありました。その前提は動物の侵入を防ぐことです。

アカマツ林から 500m 程西に進むとクロマツ林が広がり、マツの幹回りは 160 cm、胸高直径 50.5 cm ありました。林内には、ウダイカンバ、急斜面にはリョウブ、道の両側はクロマツとニセアカシアが生えていました。林床には、草原性のヨモギ、ヘビノネゴザ、スゲ類などが生え茂っていました。一区画にミズナラ（樹齢 30 年程）の植栽地があり、この場所には落ち葉が堆積していました。それを見て、広葉樹を植えることの大切さが分かりました。この森も動物の侵入防止をしなければ、自然更新には何百年もかかるようです。

■ 2. 足尾・松木郷の「白沢の森」

土の栄養が少なく、酸性度が高い土壌環境の斜面に 1 m²の穴を掘り、黒土と腐葉土を入れてハゲ山になる前に生きていたふるさとの落葉広葉樹の幼木を植えてきた「白沢の森」。

この森を観察すると、コナラよりミズナラが優占し、高木層、亜高木層の階層が出来ていました。林

床にヒゴクサは生えていますが、その他の森林性の植物や低木層が生えていません。この環境で想像できることは、生物多様性が育む肥沃な土づくりの土壌動物、ミミズや昆虫、微生物（菌類、細菌類）などの分解者が十分ではないことでした。今後、この森はウリハダカエデやナツツバキ（亜高木層）などが競争で枯れていき、残ったものによる階層がはじまりますが、まだまだ本物の森への道のりは遠いようです。

森の階層が出来つつあるので、次の段階は森の循環システムを育てることになります。土壌を豊かにすると草が生え、同時に土壌動物も増えてきます。試験的には、林内の光が入る場所に 5m×5m の区画を設けて、森林性の草（ミヤコザサ、スゲ、ウツギ、スミレなど）を植え、動物の食害防止を行って 4～5 年の観察を試行することが提起されました。

■ 3. “いのちを守る森”を目指す

気候変動に向き合い、いのちと健康を守ってくれるエコシステム（生態系）の母体である本物の森づくりは地球上に生きる私たち人類の責務です。足尾の荒廃地に植えた苗木は 5.6ha ほどの面積に約 8 万本。小さいながらも生物たちの命を育む森に生長しています。松木村跡地を訪れる方には“人は森に寄り沿って生きている”ということを感じていただけるような“松木郷”を目指し、森の手入れを進めます。

天空に旅立った先人の志と情熱を受け継ぎ、植林ボランティアの皆さま、活動を支えてくださる企業、労働組合、諸団体の皆様と共に、“いのちを守る森づくり”を目指し“山と心に木を植えて”いきます。

観察・調査者：

中村幸人アドバイザー、清水卓副代表、井上康運営委員、大野昭彦運営委員、橋倉喜一スタッフ

足尾発！

「孤高のブナ」と「希望のブナ」との対面

4月29日（祝）、中倉山のブナを元気にする恩送り活動には33名の皆さんに協力をいただきました。昨年植えた「孤高のブナ」のDNAを持つ「希望のブナ」は小さいながらも枝を伸ばし、新芽を沢山付けていました。普段は柵に囲まれて姿を見ることができない子ブナと親ブナの対面ができました。現在、気候変動により人類は初めて災害と地球温暖化の二重の苦しみを体験しています。参加者は親子のブナが自然災害にも耐えられるように中倉山の森を育て、足尾の煙害・松木村廃村の歴史を後世につなげてほしいと願いました。参加をされた中山雅人さんと那須拓陽高校の生徒と先生からの感想を紹介致します。

森づくりスタッフ 済賀正文

●参加者の感想から

4月29日の中倉山のブナ保護に参加をするきっかけは、父の友人の矢口さんご夫妻がこの活動に参加されていて、父が亡くなったことで息子の私に登ってみたいかと話があり、慰霊の意味を込めて登ることになりました。矢口さんとは何度か面識もあり、葬儀の際に中倉山に登ったのが最後の山だったということを知りました。“孤高のブナ”があるということは聞いていましたが、軽い気持ちで登りました。しかし、非常にハードな山だなと感じました。幼い頃、父に連れられて山には登っていましたが、父は登ることに対して大変ストイックでしたので、大人になった時にはもう連れていかないでくれという話をしていました。そのような父でしたので、100歳まで長生きするだろうなと思っていました。去年あたりは栃木県内の低い山に姉の甥っ子たちとも登ったりしていました。そんな矢先、1月に姉が住んでいる石垣島に一月間ぐらい滞在して戻ってきて、矢口さんの家にも行きました。その1週間後ぐらいにコロナに発症し、救急搬送されて、1月末に亡くなりました。私よりも体力があって、山に登る意欲もありました。

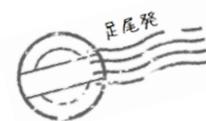


中山さんと矢口さんご夫妻

今回、父が登ったルートを矢口さんと一緒に、同じものを背負い、同じルートで同じ景色を見て登りました。登っている最中は結構きつい斜面でしたが、そのきついところから一本の“孤高のブナ”が出てきた時はびっくりしました。頂上は木が生えてない、まさに森林限界のイメージでした。父はその“孤高のブナ”を目指していったのだなと感動したこと、活動の中で人と自然が繋がっていることがじわじわ来て、すごいなと思いました。この景色は日本でもなかなか見ることができません。私は高いところが苦手なので、食事の際もゾワゾワして落ち着きませんでした。帰りも皆さんに助けられながら一緒に登り降りすることに対する感覚は、大人になっても良いなという思いと、皆さんに助けながら「頑張れ、頑張れ」との声が心地良くて、膝がもうおかしくなりながらも無事に下山することができました。「もう二度と来るか」と思いながらも、何度登ってもいい山だろうなと思いました。これからも応援させてもらい体力をつけて、また参加させていただきます。

栃木県 中山雅人





今回、2回目となる中倉山のブナ保護活動に参加しました。昨年植えた「希望のブナ」がどれほど成長したか、見に行けることが楽しみでした。山頂に着き「希望のブナ」を見ると少し成長が見られ、嬉しく思いました。この「希望のブナ」の成長が森と人を繋ぎ、これからも元気に育って行って人々の希望になることを心から願います。このブナが近年の激しい気候変動により発生する自然災害に無事耐えることができるか不安に思うことがありますが、自然災害に負けないように祈りを込めるために、これからもこの活動に参加していきたいです。

農業経営科3年 磯大耶

頂上にたどりついて、登り切ったという達成感や頂上からの景色の綺麗さにとても感動しました。また、山の上に1本だけ立派に生えているブナの木を見て、とても驚きました。周りに植物がなかった分、目立っていてとても印象に残っています。みんな植えた草の種や「希望のブナ」が立派に育ち、山に緑が戻ってきてくれたら嬉しいです。

農業経営科3年 菊地妃菜

中倉山の煙害の被害は、私が思っているよりもとても残酷なものでした。頂上に着いた時、私は違和感を覚えました。群馬県側はとても豊かな自然が広がっているのに、栃木県側には木がほとんど生えておらず山肌が露出していたのです。その異様な景色の中に生えている一本の「孤高のブナ」がとても神々しく見えました。この活動に参加して自然の脆

さと自然破壊の恐ろしさ、人間が自然を保護していくことの大切さを学び、森びとプロジェクトの活動の大切さを深く理解することができました。

農業経営科3年 高橋庵

今回の活動では「希望のブナ」に会うこと、去年植えた植生袋がどうなっているのかを楽しみに山に登りました。長い時間をかけて登り、ようやく「孤高のブナ」、「希望のブナ」に会うことができました。前回と変わらず堂々と立ち続けている「孤高のブナ」に安心し、強く印象に残りました。去年自分の手で植えた植生袋から緑が出ていること、「希望のブナ」の背が伸び成長している様が見られてとても嬉しく思うと同時に、風も強く辛いこの環境下で成長することができる植物の力強さを感じることができました。

農業経営科3年 本田風

何度か足尾に通っているうちに、不思議な感覚になってきました。松木村のあたり、資料館で見たモノクロの写真と重なって昔の方々の暮らしが見えるようです。確かに家族の暮らしがあったのだと。中倉山に登るようになって、自分たちがいなくなった未来のことを想像するようになりました。「希望のブナ」が大きくなった時、この世界はどのようになっているのかと。歴史年表の中のほんの一瞬を生きる私たちが、繋いでいくことは次世代を育てていくことかと、中倉山の稜線でそのように思いました。

那須拓陽高校教諭 池田修一

心の森便り

天国の妻に足尾の森を報告したい



下段左から2人目が中田さん

私の妻中田育子が永遠の眠りについてから早 14 年が過ぎました。思えば 2005 年 5 月 2 日、「これから足尾の山で研修が始まるので行ってくる」と出掛け、4 回にわたる宮脇先生の薫陶を受け、「この地球星のために、何も知らない私であるけれども、私でも出来る森づくりをコツコツとしていこう」と決意したと。その後も宮脇先生の NHK 講座を毎日のように聞き、自然と人との関わり、森の大切さを学ぶ、学ぶだけでなく即実行でした。インストラクター第 1 期生として、森びとの皆様には大変お世話になりました。生前彼女の机の前には、足尾の森に植樹する 5 月 28 日の写真が大きく引き伸ばされて貼ってありました。見るたびに、あの急勾配の地によく植樹できたものと思っていました。2014 年 5 月 24 日の宮脇先生を迎えての「足尾・ふるさとの森づくり」には、私も参加させていただき、「民集の杜」で植樹させていただきました。その時最初の植樹地「白沢の森」も既に立派な森になっていましたが、植樹の最上地まで登らせていただいた折は息が切れ大変でした。本当によくぞやり遂げられたと、森びとの皆様のご尽力に感銘を受けました。その時第 1 期生の方から、妻は誰よりも真剣に熱心に取り組んでいたとお話を伺い、あの身体でと涙の出る思いでした。

その時から 9 年、自身の体力の衰えを感じる中、どうしてももう一度妻が投入した森づくりの現場を見ておきたいとお電話をさせていただきました。宮脇先生の密植・混植による森づくりの大切さを積極的に学んでいる後輩の藤生さんにもぜひ足尾の現場を見ておいてほしいと願い、訪問させていただきました。

した。雨の降る日にも関わらず、森びとの皆様に温かく迎えていただきました。白沢の森は 14 年の時よりも一層立派に育ち、命溢れる森に成長しており感動でした。荒涼とした命の育たぬ地獄のごとき山は、今鶯の鳴き声が響き、苔の生えた斜面もあり、大きなシカの角や多種多様な生物の痕跡に出会い、生命が共生する立派な「森」となっていました。午後に案内して頂いた「民集の杜」も同じく想像を超える「潜在自然植生の杜」となっていて、まさに森は命の根源であると深く感動いたしました。と同時に今日までこの森を守り慈しみ、絶えることなく、20 年近く手をかけてこられた森びとの皆様のご尽力に感銘を受けました。どれほどの思いと具体的な努力がされてきたか。

14 年に参加した折、宮脇先生が「この重金属、煙害の残る足尾の山に不可能と思われた立派な森を築き上げた。この世界で初めてのことであり、大成功である」と皆様のご努力を大変評価され語っておられたことが忘れられません。破壊された自然を再生し、失われた命を回復することがいかに大変であるか、潜在自然植生の森の保全と維持に熱心に取り組み、この地球星が永遠に緑にあふれ、生物の多様性と共生する持続可能な星であり続けられるようにするには、この思いと歩みをやめないことであると肝に銘じ、改めて森びと皆様の今も継続し労力を惜しまず、取り組んでおられる姿に心からの敬意を表すると共に、この日の見た姿を感じた思いを妻に報告したいと思います。ありがとうございました。

東京都 中田欣宏

会員からの声

足尾の森の整備に参加して

私は JR 貨物労組関東地本青年部で青年部長をしています。5月16日、初めて足尾の森づくりに参加しました。足尾の白沢の森にある JR 貨物労組が植樹をしている場所は、山頂に近い急斜面にあり、この間何度も植樹をしてきました。しかし、シカやウサギによる食害や雑草に負けてしまい、うまく育っていないと先輩から聞いていました。しっかり身体を動かせる格好で気合いをいれて参加をしました。

最初は鉄筋とネットを持ち、組合員・家族が植えた木の周りにネットを取り付けるため背負子に 20 kg 程の荷物を載せ山の峰まで登り、そこからの作業になりました。柔道で鍛え体力には自信がありましたが、急斜面の山の上をあちらこちらに移動しながらのネットを張り作業は、時間的には2時間ほどでしたが思っていたよりもハードな内容でした。

合計で 64 か所の苗木にカバーを掛け、植えた木が動物に食べられないように手を加えることが出来たのは本当に貴重な体験であり、自然の中で木を守るのも大変だということを学ぶことが出来ました。山頂での作業が終わり、下に降りてきた後に銀杏の木を2本植樹しました。次に来た時にどれくらい大きくなっているか楽しみです。



終了後の意見交換の場では足尾で植樹をなぜ始めたのか、過去に銅の採掘を行い銅の精錬をする過程で出た亜硫酸ガスで山の木々が枯れて荒廃してしまったこと。また地球温暖化が進む中、木を植えることを細く長くつづけていくことの大切さなどについて話を聞くことが出来ました。

これから先、山が元の姿に戻るためにもこの取り組みを広めていき、昔の過ちを繰り返させないためにも自然を守っていきたいと強く感じました。秋の活動には青年部員への声掛けを行い一緒に参加していきたいと思えます。

JR 貨物労組 根岸大智



南相馬発

10年目を迎えた応援隊



南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊も今年で10年目を迎えることが出来ました。多くの皆さまのご支援とご協力を頂き心より感謝を申し上げます。

1月に発生した石川県能登半島地震では多くの方々が被災されたことに心からお見舞い申し上げます。幸いなことに志賀原発は稼働していなかったため、大きな原子力災害が起こりませんでした。しかし地域住民は、道路の寸断などで10日以上孤立し、さらに6カ月経過した今も復旧・復興は進んでいません。政府にはスムーズな復旧・復興をもっと強力に推し進めてくことが望まれます。13年前の東日本大震災・東電福島第一原発事故を経験した者として、安全神話の崩壊した原発の再稼働や新設は絶対反対です。

6月9日に南相馬市小高区塚原地区において開催された第12回鎮魂復興市民植樹祭には、全国から1,300名の植林ボランティアが参加し、シイ・タブ・カシなど、21種類20,000本の苗木に新しい命を吹き込みました。

植樹祭では、私も鎮魂と復興を願う市民や全国各地からのボランティアの皆さんと植樹を行いました。現在の南相馬市では原発廃炉処理汚染水の海洋放出など解決すべき問題が山積し、南相馬市の復興は未だ道半ばです。

応援隊は現在18名の会員で、高齢化が進んでいます。今後の課題は、震災を風化させず、“いのちを守る森の防潮堤づくり”を次世代に継承することです。

そのためにも会員同士が情報を共有・発信し、市民の皆さんと共に育樹活動等を担い、鎮魂復興市民植樹祭を応援する仲間づくりをしていきたいと考えています。

12年前に植樹した50cmにも満たなかった苗木たちが、今は大きいものは6mを越えるものになり、立派な海岸防災林となりつつあります。2014年に植樹した南萱浜地区の第2回会場は土壌改善され、生物多様性が顕著に見られていました。今後は市民の皆さんや全国からの植林ボランティアを案内出来るように「森の案内人」を目指していきます。これからも会員皆様のご支援・ご指導をお願いいたします。

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊代表 松林英夫



実行副委員長として挨拶する
松林さん



森の仲間たち

里親から託された苗木にいのちを吹き込む！



2015年4月、娘が大学の帰りにJR田端駅でスタジイの苗木を2本預かりました。これは当時JR東労組東京地本の「いのちを守る南相馬防潮堤の森づくり」で里親になってほしいと配っていたものです。娘は私の実家に住み、部活もしていて苗木の面倒を見られないと言うので、私が長野県飯山まで持ち帰り育てる事にしました。一緒にもらったチラシには「家庭で2年間育て、50cm～70cm位になると植樹が出来るので連絡下さい」とありました。1年目は葉が落ちてしまい元気が無くなり、2年日以降によりやく葉が始まったのですが背が伸びませんでした。9年経っても50cmにしかならず、長野では無理なのかなと思いました。チラシに2025年までと書かれていて慌てて連絡しましたが「現在使われていません」のガイダンス。それでも何とか森びとプロジェクトの方から連絡を貰える事になり本当に良かったです。3月に無事に苗木を渡すことができ、6月に植樹祭で植えられたことを聞き、肩の荷が下りた気がしました。

長野県 遠藤仁美



森びとプロジェクトでは、2013年より南相馬市で取り組んでいる「いのちを守る森の防潮堤」づくりの植樹サポートを今日まで継続しています。9年ほど前に、JR東労組東京地本としても「いのちを守る防潮堤の森づくり」を取り組み、駅頭にて里親になってもらうためにポット苗木の配布を行い、多くの方に受け取っていただきました。そして今年の春、JR田端駅頭で受け取っていただいた里親・遠

藤さんより、大切に育てていただき生長した「苗木」が帰ってきたのです！遠藤さんよりJR東労組に連絡がありました。9年もの月日育てていただき生長した苗木（スタジイ）を、遠藤さんから森びとプロジェクトの坂口さん・済賀さんとともに受け取りました。東日本大震災からの復興と犠牲となられた方への鎮魂の思いを込めて献身的に育てていただいたことに本当に感動しました。

森びとプロジェクトからのお誘いもあり、6月9日に開催された「第12回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭」にて、遠藤さんより託されたスタジイの苗木を自らの手で植樹を行い、南相馬の防潮堤にいのちを吹き込むことができました。

当日配布された市のパンフレットには、「東日本大震災で犠牲になった人々を慰霊し、震災の経験や教訓をいつまでも忘れず後世に継承する場をつくる」とともに、津波を緩衝するためのいのちを守る緑の防災林の実現を目指していく」と植樹祭の理念が書かれていました。これまで育てて頂いた遠藤さんの献身的な想いととも、植樹祭当日は静かな大海原に向かって鎮魂の黙祷を捧げました。大きな森（防災林）をつくり、多くの方々の命と暮らしを守るといふ壮大な構想を実現させるためには、「いのちを守る森の防潮堤づくり」を通じて南相馬市民と私たち組合員一人ひとりが気持ちを一つにして「人間の命と自然環境を大切に作る心」を育てていかなければなりません。遠藤さんの献身的な思いを通じて「人は森に生かされていること」を学びました。

JR東労組東京地本 対馬史幸



現地レポート

石川県能登半島地震被災地視察

6月1～2日、森びとプロジェクトと（一財）日本鉄道福祉事業協会の共催で、現地に立ち被災地から現実を学ぶため石川県志賀町と珠洲市に行きました。

初日は、志賀町内と志賀町役場、志賀原発を見ってきました。町役場では、地面が隆起してお年寄りの方が手押し車で訪れていましたが、高齢者の方には段差が大変な障害になっていました。また、昼食を食べたお店は5月9日に営業を再開したそうで、被害の大きさを感じました。その後、志賀原発に向かい、駐車場に車を止めるとすぐに警備員が駆け付け、私有地だからということで追い返されました。厳重な警戒がされていると感じましたし、何かを隠しているんじゃないかと思う雰囲気でした。一方、北陸電力の原子力発電展示・PR施設であるアリス館ではパンフレットをもって歓迎してくれ、展示物はすべて原発の安全性や利便性をアピールするようなものでした。



2日目は、2003年に凍結された珠洲原発建設計画の反対運動を中心で闘われた円龍寺住職の塚本真如さんに案内をしていただき、珠洲市に行きました。珠洲市に向かう能登半島の真ん中を走る幹線道路は途中から激しい亀裂や段差が目立ち、土砂崩れにより片側1車線となる被害を受けていました。市内に入ると、人の気配や音がなく、風には匂いもなく、生活感がないと感じました。建物には「危険」「注意」と言った張り紙が貼られ、いまだに解体もされず震災当日の姿を残していました。



高屋の海岸にて塚本さんの話を伺う



塚本さんの円龍寺とご自宅にもお邪魔させていただきました。震災当日は、母屋に居たところ最初の余震で本堂に向かい、その後の本震では立つこともままならない状態だったそうです。奥様が崩れた母屋の下敷きになり、何とか助け出したということでした。高屋地区の原発建設予定地は、円龍寺の目の前の海岸でとても景色のよい場所でしたが、隆起によって白い陸地が広がっていました。子供のころ、この海は塚本さんが遊んでいた場所で変わり果てた様子に気を落とされていました。

途中合流された市議会議員の小谷内毅さんは塚本さんとともに行動してきた仲間、最近は大欅の木が枯れているなど、気候の変化等によって森が弱っていることを話されました。震災後には自宅の前に知人や地区住民から提供された農業用タンクや洗濯機4台を設置し、里山から水を引き、被災者の暮らしをつなぐいのちの水を提供する互助精神溢れる話を伺いました。最後に高屋漁港に行きました。海底が2m程隆起したことにより、複数の漁船が座礁し、出航できないために漁師の方々は生活に困っていました。

特に高屋地区などではさらに避難ルートや支援物資、通信手段なども途絶えました。珠洲原発が建設され、志賀原発を含め爆発事故が起きていたらどれだけの命と暮らしが奪われたのか。豊かな森林や海が放射能汚染された想像を絶するような状況が脳裏に浮かび、身震いが起きました。「原発は安全」が幻想でしかないことを能登半島地震は示してくれました。脱原発・脱炭素社会への課題は何かを自分自身で考え、行動していきます。

広報サポーター 福澤猛

エコ散歩

明治神宮 100 年の森を散歩



5月25日（土）、7回目のエコ散歩は人の手によって作られた「明治神宮の森」を歩きました。この日は快晴で、気温もぐんぐん上がり、近くの路面では55.8℃を記録しました。駅前の鳥居付近は、大勢の外国人の方々の賑やかな声と、おもむろに始まった駅前のライブ音が激しく、病み上がりの先生が話すには酷な状況から、少し奥まったところへ移動して散歩のスタートです。ほんの20mも歩くと、森の木陰で涼しさが増し、駅前の喧騒も全く聞こえなくなるのだから森の力は凄いです。

今回も森の案内人は、森びと植生アドバイザーの中村幸人先生に務めていただきました。早速この森の成り立ちについての説明が始まります。今から100年ほど前に、日本全国からの献木で数百年後を見据えた壮大な計画によって作られた森であるということ。この地にあわない木々は淘汰され今があるということ。そしてそれは今も進行中だということ。歩いては、草木が出すかすかなサインを見つけるとはわかりやすく解説を加えてくれます。

森の中で圧倒的な体躯を持つクスノキも、より南の海岸沿いに育つしぶとそうなウバメガシも、この場所には適さず、森の中では次世代を作ることがで



きないのだから。水場近くのスダジイは弱り、逆に湿気が好きなケヤキは大きく成長する。その土地の特徴が大きく影響することがわかります。自ら動くことのできない木々が植えられた場所で精一杯生きている、そんな姿を垣間見ることができました。

この森も、やはりナラ枯れの被害が広がっていますが、倒れた（倒された）木の場所には我先にと陽樹が茂っています。次世代の陰樹たちも虎視眈々と次の主役を狙っていて、森のダイナミクスを感じることができました。

今回は、嬉しいことにエコ散歩初のお子さん（小学2年生の女の子）がお母さんと一緒に参加してくれました。最初は少しはにかみながら、慣れてくると参加者の間を縦横無尽に歩き回り、たくさんのお子さんに興味津々で、あっという間に「森の宝物」を探す「ビンゴ！」を完成させていました。

ヘクソカズラの葉の匂いを嗅いで「ダイコンおろしの匂い」との表現には、みんながなるほどと感心しきりでした。大人は名前に引きずられて「臭い」となる訳ですが、子供の素直な言葉には驚くことが多いですね。

中村先生のお子さんの目線に合わせた説明も秀逸で、却って大人の私たちが「そういうことなのか！」という新鮮な内容に感じられ、とても楽しく、そしてためになる森散歩となりました。参加されたみなさん、次もまた一緒に歩きましょう。毎回参加くださる方も、新しく興味を持ってくださる方も次の森散歩、ぜひご参加ください。

運営委員 小黒伸也

森散歩、次回は9/7(土)です！

次回は夏の明治神宮の森を歩きます。遠方の方もいらっしゃるかもしれませんが、東京への旅行に組み込んでみてはいかがでしょうか。また、お知り合いのお子さんにもぜひお声がけください！

<明治神宮の森>

1915年から「永遠の森」を目指して作られた人工の森。各地の献木365種約12万本が植えられた。樹齢100年を超すスダジイやクスノキといった常緑の森が魅力。JR原宿駅から徒歩すぐ。



5月26日、原発を所管する経済産業大臣を務めていた西村康稔衆議院議員が「珠洲市の住民が原発（新設）に反対したから復興が進まない」、「地震など1000年に一度」などと発言をしていたことが報道された。もし、計画通り石川県珠洲市に原発が建設されていたら東京電力福島第一原子力発電所と同様の事故になっていた恐れがあったにもかかわらず、啞然とした。6月に珠洲市を訪れたが、震災直後ではないかと感じるほど、倒壊した家屋はそのままであり、中でも断水が続いている地域、公費による家屋解体も申請の僅か4%など、国や自治体は半年間何やっていたのだろうかと怒りしかない。復旧・復興が進まないのは、能登半島の地理的な条件や高齢化や過疎の問題はあるにせよ、半年も経つとこれに乗じて「棄民化」しようと感じる。

今年1月に発表された日本の人口は1億2409万人で、そのうち65歳以上は3622万8000人、75歳以上は1997万人。この先の少子高齢化を考えると、防災は自助だけではなく、公助に頼らない地域での共助の役割が重要だ。島国で地震大国・日本では、いつどこで災害に遭遇するか分からない。会員の皆さん、地域や職場の防災計画は本当に大丈夫だろうか？ご自身と家族や仲間の命と健康を守るため、お互いに情報を共有しあう場をつくり、リスクに対する備えと慌てず行動できる心構えを持とう。

運営委員 小林敬

編集後記

珠洲市の被災地に入りま

した。本当はボランティアの一つでもできたら良かったのですが、奥能登という場所がら、短期でのスケジュールでは無理があり、また

実際に行ってみてわかったことは、生半可なボランティアはできないな、ということでした。被災のあった街は本当に静かで、つい先日発生したのではないかと見まがうほどの惨状がそこらこ

らに広がっていました。案内をしてくれた塚本さんの「棄民」という言葉が胸につき刺さります。被害のなかった地域に住む私たちの認識とは天と地ほどの差がある、ということ

今号の記事には、たくさんの「つながり」がテーマとしてありました。パートナー、親、次世代、ど

り、被災地と日常、過去と未来。このつながりは一つの森のようで、そしてひとつひとつを大切にしないと簡単に壊れてまうもののように思います。山と心に木を植える、というのは「つながる」ということなのではないかと、少し認識の深まった今号の編集となりました。「能登深く山も心もつながって」

運営委員 小黑伸也



※第12号のお詫び：P.14 矢口益巳（やぐちますみ）さんのふりがなが誤って「やまぐち」となっておりました。訂正するとともに謹んでお詫びいたします。

森の木魂（こだま）第13号（2024年7月24日発行）



発行：森びとプロジェクト
 発行人：桜井勝延
 編集人：森びとプロジェクト編集委員
 第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田3-2-13 3F 303号室

TEL&FAX 03-6417-3750

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info

